

東京学芸大ヒューマンライ ブラリー2024 報告書

2024年12月8日（日）開催

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2024 実行委員会

代表 | 岡 智之（国際交流／留学生センター）

目次

はじめに.....	2
ちらし 東京学芸大学.....	3
当日プログラム	6
当日の写真	8
準備と当日までの活動	11
当日スケジュール	11
反省会議	11
読者アンケート	13
読者の感想文	17
「本」のアンケート	21
スタッフのアンケート	21

はじめに

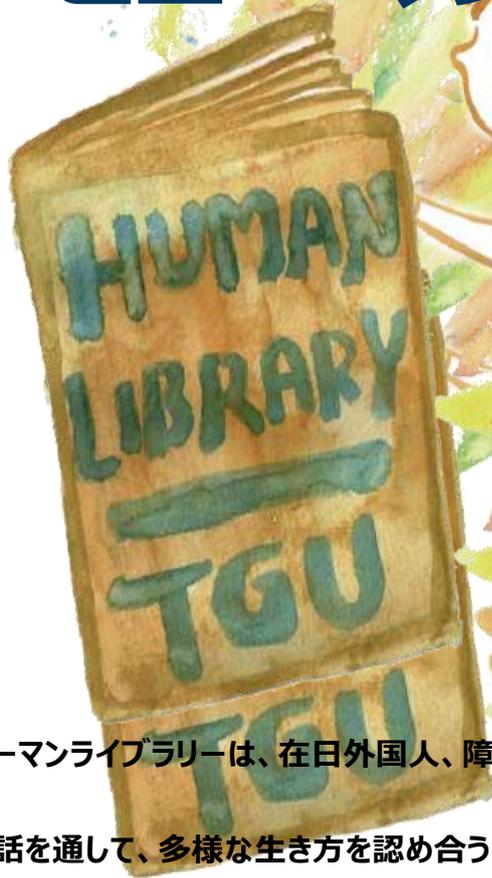
東京学芸大学ヒューマンライブラリーも2024年で、9年目になる。今年は日曜日の昼間に対面で、計52名が集い、活気あふれる会となった。今年は新しい「本」が4冊入り、13冊の「本」の語りを聞くことができた。学生スタッフも新しいメンバーが4名入り（うち1年生3名）新鮮感が感じられた。教室のブースでは、「本」と「読者」の熱心なやり取りが行われた。報告書での読者の感想などを読んでいただいても、やはり、対面で直接語り合えることの素晴らしさが、ヒューマンライブラリーのだいご味だと感じた。毎回、運営していくことの大変さは感じるが、このヒューマンライブラリーの大きな意義とやりがいを感じる。皆さんが必要とされる限り、引き続き、ヒューマンライブラリーの開催を続け、発展させていきたいと考える。来年は、10年目指して引き続きのご協力をご理解をお願いしたい。

東京学芸大学ヒューマンライブラリー2024 実行委員会代表 岡 智之

ちらし 東京学芸大学

ヒューマンライブラリー

2024



東京学芸大学 playground ラボ

ヒューマンライブラリーは、在日外国人、障がい者、セクシュアルマイノリティなど、生きている「本」と「読者」との対話を通して、多様な生き方を認め合う、多様性に関われた社会の実現を目指すイベントです。生きた「本」のタイトル、あらすじは、本ちらし 2, 3 ページにあります。5 冊まで本を借りられ、30 分ずつお話しできます。下記予約フォームで希望する「本」を予約してください。

日時：12月8日（日）12:30～17:30

場所：東京学芸大学 N 棟（中央4号館）3階教室
主催：東京学芸大学ヒューマンライブラリー2024 実行委員会（代表：岡 智之）
後援：小金井市教育委員会、小金井市社会福祉協議会
協賛：東京学芸大学教職員組合
問合せ先：東京学芸大学国際交流／留学生センター 岡 智之
okatom@u-gakugei.ac.jp

予約フォーム：<https://forms.office.com/r/gzpgzyKVxD>
申し込み締切：定員が埋まり次第締め切ります。先着順で一回のセッションの「本」一冊につき、5人まで一緒に参加できます。

東京学芸大学ヒューマンライブラリー
2024申し込みフォーム



東京学芸大学ヒューマンライブラリー2024「本」のタイトル、あらすじ一覧

*下記の「本」を5冊まで借りられ、30分ずつ対話できます。

作者名	カテゴリー	タイトル	あらすじ
中嶋秀昭 <オンライン>	災害対応支援（世界の医療団）	洪水と気候変動ー Bangladesh の事例から	9月に能登で洪水が発生しましたが、世界中の各地が洪水に見舞われています。私が支援に携わっている Bangladesh でも600万人近くが被災した大洪水が起きました。洪水被害にも社会的・経済的要因が絡み、これは「複合災害」になり得ます。また、洪水のような自然災害は気候変動によって日本を含めた世界中で今後さらに多発・深刻化することが懸念されます。現地での被災者支援に基づき、現地の現状を例としてお話しします。
朴梨香 （ばく・りひゃん）	在日朝鮮人	在日朝鮮人である私について <NEW>	私は日本で生まれ育った在日朝鮮人3世です。祖父が1930年代に日本に渡ってきたことがルーツです。そんな私は小学校から高校まで朝鮮学校に通いました。私が自分の民族的アイデンティティについてどのように考えてきたのか、今どのように考えているのかを話せればと思います。
長江春子	中国帰国者 2世	日本と中国の狭間に生きて	中国残留日本人孤児2世という宿命に翻弄され、特に中学から大学までの10年間、中国人と日本人という二つのアイデンティティ、言語や文化の壁、貧困、偏見や苛めに苦しみました。一方で多くの方々に助けられました。そうした経験から学んだことも多く、今の生き方につながっています。長年蓋してき辛い体験でも若い方々の「平和の学び」につながればと、近年自伝『小春のあしあと』（Amazon）を自費出版したりHLに参加したりと自己開示中。
小室敬子 <NEW>	難民の子供 （クルド日本語教室）	クルド難民の子供はどうやって「日本」を学ぶか？	親の都合で日本に連れてこられたクルド人の子供たちは、日本で日本語と日本の生活をどのように学ぶか。小学1年生の日本語ゼロの子供たち。中学生になってから日本に来た子供たちは日本語を使えるようになるのか。高校に進学することが出来るのか。自分たちの人生を日本で切り開いていくことが出来るのか。
アスティク New>	インドネシア人留学生 教育支援	私が日本語を学ぶことになった理由	インドネシアの農村に生まれた27歳の国費留学生です。イスラム教の価値観では、女性は中学を卒業して結婚し、男性は工場や農業で働きます。そんな考え方に疑問を持った私は、両親を説得して高校進学します。当時、高校の先生が唯一、私の話が分かってくれる大人でした。その時、日本語の先生に出会い、その先生の教え方が一番印象的で日本語に興味を持ちます。大学進学は親に反対されたため、先生方の金銭支援で大学に進学します。その後国費奨学生になり大学生活を続け、新しい世界が広がりました。将来は村の子供たちに高校進学のための教育基金を作りたいと思っています。
チャンハー ルオン <NEW>	ベトナム人留学生	異国での子育てと学業の両立	2012年から日本語を学び、今回は進学のために5回目の来日をしましたが、出発直前に妊娠が判明しました。日本での出産と子育てを一人でしながら学校に通う決意をし、慣れない環境での妊娠・出産や文化の違い、孤独感と向き合いながら学業と仕事を両立する毎日です。しかし、日本の方々からの温かい支援が心の支えとなり、ここまでやってこられました。この助けがなければ、困難を乗り越えるのは難しかったと感じています。

いちまるのり	LGBT	私はXジェンダー(性自認についてのあれこれ)	普段は、自分の性自認についてあまり意識せず生活しています。(職場では、管理職にカミングアウトしています)たま～に、不思議な出来事が起こります。
りゅうや	LGBTQ (ゲイ)	同性パートナーの親の介護を体験して感じたことや考えたこと	2年前まで同性パートナーの父親の介護をキーパーソンとしてしていました。パートナーの父親は私の方の関係について知っていましたが、本人としては地域や知り合いには知られたくない気持ちがずっとありました。私は以前、高齢者の介護の仕事をしていたのですが、パートナーの親の介護という貴重な体験を通して感じたことや考えたことを今回はお話したいと思います。
ひらり	LGBTQ	トランスジェンダー女性 レズビアン(「T」且つ「L」)の苦悩	「体の性が男性で恋愛対象が女性」という、傍目からはごく普通の男性にしか見えない、結婚も子作りも可能な私。しかし、トランスジェンダー女性「T」且つレズビアン「L」といった複数のマイノリティ性をあわせ持つダブルマイノリティの存在やニーズが世間ではあまりよく知られていないために、その稀有な生きづらさを気軽に相談できる相手がほとんどおらず、生活場面では一人で思い悩むことも多々あります。
及川澄志 (おいかわきよし)	聴覚障害	聴覚障害者の世界の一端	日本には約29万人の聴覚障害者が存在しており、その数だけ一人一人の聞こえ方が違います。また、コミュニケーションの手段もまちまちです。ここでは、どんな聞こえなのか？聴覚障害者のコミュニケーションとは？といったお話をさせていただきます。
大谷重司 (おおたにじゅうじ)	視覚障がい	ベンチプレス世界チャンピオンの実態	1. 現役の健常者チャンピオンは眼が見えない66歳の男です。一昨年の3月の全国大会でも健常者の試合で優勝。 2. いろんな場面で視覚障害者は世間から分離されています。図書館でも点字図書。スポーツをするにも障害者専用のスポーツセンターがあります。その実態に疑問を持ち続けていました。 3. 町内でのスポーツジムへの参加。これだけで喜びは完結していました。 4. 可能性を見つけられたこと。限界を捨てること意識の変化。
小山祐介 (コヤ)	うつ病当事者	うつになったあのと、いまとこれから	システムエンジニアとして勤めていた24歳のとき、残業100時間以上の超過労働、常駐先のパワハラが引き金となって鬱を発症しました。10回近く転職、たくさんの人に手を差し伸べてもらってアートやエンタメの活動をしてきた結果、実体験を活かした起業の機会をいただくも、挫折。うつ病当事者であり、支援者として障害者グループホームで働きながら気づいたこと、いま自分の中にある葛藤とこれからしていきたいこと、お話しします。
浜田有子	高次脳機能障害・失語症	隠れた障害、見えない障害。その心は？	障害者としてオープンにするか、クローズにするか。その悩みを「分かりにくい」方々とたくさん出会ってきました。私は過去、脳梗塞で長期入院し、リハビリを経て今は高次脳機能障害・失語症と同名半盲です(意思疎通はしっかり話せるので安心して下さい)。日本の障害者法的雇用は2.5%に引き上げられ、良い事だけれど中々難しいもの。障害者として働いている当事者をリアルでお伝えします。

当日プログラム

東京学芸大学 ヒューマンライブラリー 2024 プログラム

日時：2024年12月8日（日）12時半～17時半（12時15分受付開始）

場所：東京学芸大学 中央4号館（北講義棟：N棟）3階教室

ごあいさつ

本日は、「東京学芸大学ヒューマンライブラリー」にお越しいただきありがとうございます。
ヒューマンライブラリーは、2000年デンマークで開催されて以来、現在までに70カ国以上で開催され、わが国でも全国的に行われている多様性理解のイベントになっています。東京学芸大学では今年9年目になり、13冊の「本」の方を迎えて、開催することになりました。本日は、「生きた本」との対話を心ゆくまでお楽しみください。

主催者一同

主催： 東京学芸大学ヒューマンライブラリー2024 実行委員会（代表：岡 智之）

後援： 小金井市教育委員会、小金井市社会福祉協議会

協賛： 東京学芸大学教職員組合

お問い合わせ先： 東京学芸大学国際交流／留学生センター 岡 智之（〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1）
電話&Fax: 042-329-7235 / e-mail: okatom@u-gakugei.ac.jp

★ 当日カンパも受け付けております。よろしくお願いたします。

ご利用手順

1. 受付で、お名前と予約（「本」の時間と場所）を確認いただけましたら、予約された時間帯の5分前までに、対話の部屋にお入りになり、席にお座りください。
2. 対話の時間は、30分です。終了5分前にタイムキーパーが連絡いたします。終了時間が来ましたら、それ以上質問などなさらずに、すみやかに終了ください。
3. 対話以外の時間は、N304の読者控室でおくつろぎください。
4. 16時30分からN313で、本の方・読者の方・スタッフの交流会を行います。よろしければご参加ください。
5. 読者アンケートがありますので、アンケートフォームより、「本」へのメッセージなどお書きください。
6. 何か質問等ございましたら、青色のスタッフジャンパーを着た、スタッフに遠慮なくお尋ねください。

東京学芸大学ヒューマンライブラリー
2024アンケート



利用上のお願い

1. 「本」の方を傷つけるような言動をしないでください。「本」「読者」「スタッフ」に対する迷惑行為が見られた場合、退場していただく場合があります。
2. 主催者並びに「本」及び同席者に無断で、写真撮影や録画、録音はしないでください。
3. 「本」の方の個人情報を許可なく、ネットや印刷物にして公開しないでください。
4. 「本」の方の身体的・精神的都合で閲覧中に貸し出し中止になることもあります。
5. スタッフ及びメディアが写真撮影や取材に伺うことがあります。写真に映ることや取材を避けたいという方は受付（又はその場）でお申し出ください。

ヒューマンライブラリー2024 タイムスケジュール

教室/机番号	第1回 12:45- 13:15	第2回 13:30- 14:00	第3回 14:15- 14:45	第4回 15:00- 15:30	第5回 15:45- 16:15	交流会 16:30- 17:30
N310/311	中嶋秀昭	中嶋秀昭	—	中嶋秀昭	—	朴梨香
N312	大谷重司	及川澄志	大谷重司	及川澄志	及川澄志	長江春子
図書室	長江春子	浜田有子	長江春子	浜田有子	長江春子	浜田有子
情報演習室	朴梨香	朴梨香	朴梨香	—	—	ひらり
多目的室		小室敬子		小室敬子	小室敬子	大谷重司
N313①	ひらり	りゅ〜や	ひらり	りゅ〜や	ひらり	小山祐介
N313②		いちまるのり		いちまるのり	いちまるのり	りゅ〜や
N313③	アスティ	ルオン	アスティ	—	ルオン	
N313④	小山祐介	—	小山祐介	小山祐介	—	

* 会場配置図（北講義棟3階）



当日の写真

小山祐介さん (N313)



りゅ～やさん (N313)



のりさん (N313)



アスティさん (N313)



ルオンさん (N313)



中嶋秀昭さん (N310/311)



浜田有子さん (図書室)



長江春子さん (図書室)



及川澄志さん (N312)



大谷重司さん (N312)



朴梨香さん (情報演習室)



小室敬子さん (多目的室)



全体交流会 (N313)



全体写真↓



準備と当日までの活動

- ・第1回実行委員会：2024年10月23日（水）昼休み N313

参加者：岡 智之、彭越、劉シソン、立川、増田、干場

本の担当決め、当日スケジュール、宣伝方法などについて話し合う。

- ・10/30（水）Microsoft FormsWEB 申し込みを開始。学芸大学ホームページ、学芸ポータル、留学生ML、異文化間教育学会MLなどで宣伝。
- ・12/27（水）昼休み N313 第2回実行委員会 当日のスケジュール、役割分担の打ち合わせ

当日スケジュール

- ・11時半 スタッフ集合（N棟3階）打ち合わせ、会場準備（張り紙、受付準備、会場机配置など）、案内板設置、受付シュミレーション（名簿で名前チェック、プログラム渡す、場所・時間の確認）
- ・11時すぎ 日本亭小金井北口店 弁当受け取り（蘇／劉）、11時半武蔵小金井駅大谷さん迎え（彭）
- ・12:15-12:45…受付開始（江口、立川、干場、君和田、袁）、外案内…N棟前（増田）、正門前（蘇）、S棟前（劉）
- ・12:45以降…受付、各部屋スタッフ配置、タイムキーパー
- ・16:15- 交流会準備 N313（全員）—8のテーブル作る、「本」と担当スタッフが座る
- ・17:30- 最終片付け（全員） 18時までに解散 大谷送り（江口）

反省会議

日時：2024年12月11日（水）12:10-12:40

参加者：岡、彭越、立川、袁

1. 参加者数

参加者 総計 52 名 読者 29、本 13、スタッフ 10

- ・読者内訳：学芸大生 15（留学生 6）、他大学学生/教職員 5、一般 9

★ 去年に比べると参加者数はだいたい同じ。スタッフの入れ替わりもあり、4名新しいスタッフが入った。今後新しいスタッフももっと入れたい。

2. 日程、スケジュールについて

- ・やはりこの時期寒いので、受付は教室内（N304）にした方がいいかも。

3. 「本」の設定について

- ・今回は、新しい本が4冊開拓できた。留学生の「本」も結構好評なのでこれからもっと入れてもいいと思う。毎年本の入れ替わりは必要である。
- ・新しい本と事前に司書と ZOOM で打ち合わせ、リハーサルができた。（小室さん）

4. 広報・宣伝について

- ・ 学内ポータルや学会のMLからも来ていたが、やはり、先生・知人の紹介というのが大きいと思う。口コミが重要である。

・

5. 当日の運営について

- ・ 準備…会場案内の時、手持ちの案内板をつけたのはよかった。
- ・ 受付…メモを用意して順番をそこで書いてもらった方がよい。
- ・ 「本」に対するマイクロ・アグレッション（意図しない差別的発言）があった。すぐに対応できなかったが、今後注意したい。⇒案内文にどういうことがマイクロアグレッションに当たるか例を挙げておくといよい。
- ・ 各教室・セッションでの問題…スタッフが入っていないブースもあった。タイムキーピングがうまくいかなかった場合もあった。
- ・ 交流会…交代の時間があつたのはよかった。

7. 今後の予定、課題

- ・ 報告書の作成…読者アンケートの集計、スタッフの感想文12月中ー1月中には完成。

読者アンケート

ヒューマンライブラリー全体の感想

- ・ みなさん温かく、丁寧にお話してくださって嬉しかったです。辛いこともあったと思いますが、言葉にいただきありがとうございます。
- ・ これまで屋外での小規模なヒューマンライブラリーと、東京ヒューマンライブラリー協会での対話カフェにしか参加したことがなく、大学でのここまで大規模なイベントには参加したことがなかったのですが、毎回毎回、中身が濃くて、全く飽きず（それどころか、もっともっとお話を聞きたくて、時間が足りませんでした）、充実しまくっていて、ワクワクが止まりませんでした。岡先生、本日は本当に素晴らしい時間をどうもありがとうございました。個人や小規模団体ではなかなかここまで大規模なイベントは開催が難しいので、是非とも大学でこのような魅力的なイベントを続けていってほしいです。来年も大変楽しみにしています！
- ・ LGPTQの方の話しか聞けなかったのですが、日本のLGPTQのことについて詳しく分かりました。
- ・ 中嶋秀昭さん、浜田有子さん、長江春子さん、いちまるのりさん、及川澄志さんの5冊の本を読む機会を頂きました。みなさま、ありがとうございました。地域には様々な方が生活しているので、それを知る機会だと思ひまして、参加しました。私自身は、男性、日本人、ということで、認識していますが、そのような認識は、無数の自分の認識の中の一つであり、災害のことを勉強していた時期がありましたので、多様な人間のあり方を理解する良い機会となりました。
- ・ とても良かったと思います。ボランティア活動に参加される方々は素晴らしかったと思います。
- ・ スタッフも読者も、女性が多い（く偏っている）など感じました。多いのは結構なのですが、男性が少ないのは勿体ない。日本人男性は相手の背景に思いを巡らす想像力が相対的に弱いので、若い時からこのような『自分とは全く異なるバックボーンを持つ本』を行間まで深く読み込む体験ができれば、社会も変わっていくだろうと思います。

読んだ「本」の名前と感想、「本」へのメッセージをお書きください。

朴梨香さんへ

- ・ 職場に在日コリアンの同僚がいますが、あえてその部分について語ることは無かったので、学ぶ機会を持って良かったです。
- ・ スタッフさんが現れず、進行サポートなし、読者は年輩者ばかり、という条件下で全く物怖じせず、話を進めていく統率力がお見事でした。在日朝鮮人についての資料も、簡潔で要を得ており、ためになりました。朝鮮、日本、そして第二次大戦の戦勝国の政略に翻弄され、個人ではどうにもできない立ち位置から社会の狭間、矛盾を見つめる眼差しと、率直な言葉が鮮烈でした。今週末で24歳になるという若者が身につけている『世界の常識』たるべきことを、日本人は古いも若きも殆ど知らない。いまだそれに気付かず、恥ずかしいとも思わない。私達は知らなければならないこと、学ぶべきことがあまりに多い。堂々と朝鮮名を名乗り、前向きに生きている朴さんにこちらが救われ、勇気付けられました。これから自分に何ができるかを追求しながら、朴さんのご活躍、未来を応援しています。道を切り拓いた先には新しい景色が見えるでしょう。ありがとうございました。

長江春子さんへ

- ・ 戦争によって翻弄される半生の大変な大変なお話でした。「戦争をして得をするのはいつも権力者。被害を受けるのはいつも庶民。絶対に戦争をしてはならない」という強いメッセージが伝わってきました。
- ・ 長江さんの本「春子のあしあと」をざっと読みました。発表も聞きました。在日外国人のアイデンティティや、いくつかの壁、心理の葛藤等を拝読し感動しました。確かに、年齢の壁、言語の壁、ジェンダー問題、また、募集要項に書いていないですが、応募したら「外国人だからダメだ」のようなケース等は先進国である日本の世界イメージとは相応しくないと痛感しました。早く社会的な仕事環境は外国人にも優しくよう、早く改善できるようにお祈り致します。この機会を提供いただいた主催者に感謝いたします。
- ・ この方のお話が聞きたくてイベントに申し込みました。期待以上の読み応え、力強く流暢な語りに圧倒されました。よくぞこれだけの史実とライフヒストリーを30分に凝縮した、その知性もさることながら、福祉課の職員に正論で食ってかかった情熱も並大抵ではない、と感じ入りました。同じ2世でも日本社会から孤立し、困難を訴えようにも表現できない人の方が多い、諦念と怨念が渦巻く2世と言語的にも経済的にも自立適応している2世には深い断絶がある…と外野の日本人の目には映るのですが、その責任は自分達にある、とも認識しています。まず事実やそこにいた人々をなかつたことにせず、きちんと見つめ直したい。反省や謝罪は、一人一人の思いが積み重なったところで中身を伴うものと思います。その先に、国籍でも血筋でも規定されず、自分の人生を自分で選び、つかみ取れる社会への道が拓けると信じます。戦後100年かかっても、春子さんの生き方と著書はその道標になる、私達がしていかなければ、と思いを新たにしました。ありがとうございました。
- ・ 日本と中国で体験されたことのリアリティに一気に中国残留孤児の問題がニュースで見ただけの問題ではないと感じました。ご自身の体験を踏まえて、現在外国ルーツの子供達のためにされている活動に尊敬の念をいただくとともに、とても興味が沸きました。

中嶋秀昭さんへ

- ・ 世界の医療団として支援を行うということで、今現在ミャンマーはここ100年で初めての被災をした話を伺い、日本だけでなく世界中で気候が変動していることを改めて実感させられた。医者もおらず薬もないために、患者は公的医療施設に行かないことを聞きとても驚かされた。
- ・ バングラディッシュで起こった洪水について詳しく知ることができました。自然災害はなかなか身近なものに感じられないのですが、世界中で起こっている事例を聞きながら、そんなに他人事ではないことを痛感しました。
- ・ 洪水と気候変動という題で、バングラディッシュの例をもとに教えていただいた。途中、現地の住民からのメッセージの映像を見せていただいたが、なぜ私はこのニュースを知らなかったのかと、ニュースを最近見ていなかったことを後悔した。バングラディッシュの障害者は隠されているということも教えていただき、どうしても先進国の教育・福祉に目を向けがちだが、真に知るべきなのは途上国の様子なのではないかと考えた。

小室敬子さんへ

- ・ 日本語教師としてクルド人コミュニティーとどうかかわっているか、とても興味深かったです。実際のお教室を見に行ってみたいです。
- ・ エネルギッシュな語り口で、65年の人生、現在の活動と思い描く夢まで絵巻のように広げて下さり、日本人女性として誇らしい先輩に出会えたことに感謝します。自分も中国帰国者の日本語教室のお手伝いをさせてもらっていますが、一向に身に付かない中国語に忸怩たる思い…小室さんは素養もあつたのですが、教室を始めてからトルコ語を習得したとの話、自分もコツコツ努力せねばと背筋が伸びました。日本で暮ら

すクルドの人々が置かれている厳しい状況（苛烈かつ理不尽なヘイト）を嘆くより、あっけらかんと笑い飛ばす強靭さに、支援者のあり方をまた考えさせられました。人生のロールモデルとして、外国にルーツを持つ人のサポート事例として、糧にしていきたいと思います。今後も貴重なクルド支援者として、末永いご活躍をお祈りします。ありがとうございました。

- ・ クルド難民の問題は最近では少し聞くようになったものの、まだまだ知られていないことが多いように思います。長く支援されている方からの話が聞けてとても勉強になりました。そして、日本で育った子ども達のこれからも気になっています。応援しています。

りゅ～やさんへ

- ・ 本日は貴重なお話をしていただきありがとうございました。とても波瀾万丈な人生を送ってこられたんだなと感じました。勝手な想像ですが、周りから心無い言葉をかけられることもあったと思います。辛い思いをたくさんしてこられたと思います。それでもこうやってお話してくださってありがとうございます。恥ずかしながら、自分の質問の中で「結婚はしたいと思うのですが」という言葉が自然と出てきていました。様々な家族の形があると理解していたつもりでしたが、知らず知らずのうちに結婚ということに捉われていたのだなと気づきました。焦らず、自分にとってしっかりとくる形を見つけたいなと思います。また、死や老いについての考え方についても丁寧に答えてくださりありがとうございました。死や老いは悲しいです。ですがきっと、ずっと元気なままでは感じられないような、感謝や思い出を振り返る気持ちのような、濃い感情、時間を感じられるという一面もあるのかなと思いました。本日は本当にありがとうございました。
- ・ LGBTQはここ最近大きく話題になっているが、あまりにも関わりがなかったために考えるきっかけがなかった。しかし今回お話を聞いて、LGBTQの方に対して世間からは厳しい目を向けられることや、理解を示すまで時間がかかることなど考えさせられるものが多くあった。

ひらりさんへ

- ・ トランスジェンダーやXジェンダーの方々が性自認についてどのような過程をたどるのか、どのように迷い、困惑してきたのかについて、当事者のお話を伺う機会が今までなかったので、非常に興味深かったです。とりわけ、ひらりさんのプレゼン力、質疑応答の際の「打てば響く」明快でわかりやすい回答には、引き込まれました。私が何の気なしに無意識に使っている言葉が、性マイノリティーの方々を不愉快な思いにさせ、傷つけていることに思い至り、もっと敏感にならなくてはいけないあと反省いたしました。
- ・ 幸運なことに、お嬢様の視点から見たひらりさんのお話も伺うことができた。小学校教員の保護者の呼び方が「お父さん」「お母さん」であることへの違和感や校長と担任にだけオープンにしたのに教員全体へ共有されていることはアウトィングであることのお話は私にとって非常に衝撃的なお話だった。

アスティさんへ

- ・ 教育の大切さを感じ、2時間をかけての通学や留学しての努力など、その頑張る姿に感銘を受けました。イスラム教の教育観を知らなかったのととても勉強になりました。宗教と教育がこんなにも関わり深いこと、日本にいて気づけていませんでした。これからインドネシアで、良い先生として多くの子供達の未来に関わっていかれる様に思います。
- ・ いい先生との出会いが日本へ来るきっかけにもなったことを聞いて、人との大切さを改めて感じました。進学に反対するご両親とも上手に向き合っているようにも見え、素晴らしいなと思いました。

ルオンさんへ

- ・ 出産という不安だらけの生涯で12を争う様な大きな出来事を、コロナ禍で一人で乗り切られたお話に、大変驚きました。今笑ってお話しますが、どんなに不安だったでしょう。異国で乳児を抱えながらの学問、その努力に頭が下がります。お子さんとの時間を楽しみながら、ベトナムの日本語教育を引っ張っていく方になられると思いました。

及川澄志さんへ

- ・ 頭の上に飛行機が飛んで、ようやく聞こえるぐらいであるそうで、実際に難聴体験をしたが、中度のレベルでもだいぶ聞こえにくいと感じた。日本には約 29 万人の聴覚障害者がいることに驚かされたとともに、手話にも種類があるそうで、学んでみようと思った。
- ・ 及川さんのお話を聞くのは2回目だが、新しいお話も聞くことができた。特に、昭和のときはまだ字幕がなく、「ザ・テレビジョン」であらすじを見てからドラマを見ていたこと、聴覚に障害をもつことで日本人なのに日本の文化を味わえなかったというお話は衝撃的だった。聴覚障害者はコミュニケーションの面で困難が多いと知っていたが、娯楽の部分でも壁があったことは盲点だった。

大谷重司さんへ

- ・ 視覚障害者でありながら、通常の方と同じパワーリフティングの世界で優勝されるのは偉業ですね。とてもお若々しく、年齢を伺ってびっくりしました。私もこれから鍛えたいと思います。
- ・ ブラインドベンチプレスとの出会いや、アメリカでの大会で感じた「障害者」という枠組みのない雰囲気よさを教えていただいた。日本でも「オリンピック」「パラリンピック」「デフリンピック」と分けられているので、完全に認識を壊すのは難しいともおっしゃっていた。ベンチプレスのおかげで筋肉が大きくなり若々しく、年齢をうかがった時10歳以上想像と離れていたことに驚いた。運動をすることは精神上だけでなく確実に身体にも良い影響を及ぼしているのだろうと考えた。

いちまるのりさんへ

- ・ おそらく同年代の女性として、いろいろ共感できる場所が多くありました。

小山祐介さんへ

- ・ 貴重なお話をしていただき、ありがとうございました。1番印象に残ったのは、私はうつ病になったことがないから分からないと素直に伝えていいということです。今まではどうせ分からないだろうと言われることが怖かったです。分からない自分が申し訳ないと思っていたのですが、それはしょうがないことだと認めてくださり、気持ちが楽になりました。また、小山さんが「部署を変えてくれ」と頼んでも、「あなたができないのだから」と向き合ってもらえなかったとおっしゃっていました。
このようなことが無いように、辛いと訴えている人がいたら話を聞き、改善策を考えたいけるような人になりたいし、そういう人が増えていけば良いなと感じました。本日はありがとうございました。
- ・ うつ病を経験され、当時をどのように振り返るか、今もどうやって体調のコントロールを図っているか、参考になりました。
- ・ 自分も文系から入社後の研修を経て、システムエンジニアとして働いた経験があり、統合テストやエラー対応の過酷さを思い出しながら拝聴しました。上司からのパワハラはありませんでしたが、初の新卒女性総合職という立場で先輩（全員一般職）とのコミュニケーションが難しく、過労とストレスで生理が止まり、結婚して不妊治療が必要だったため5年で退職しました。身体に赤信号が出たため方向転換できましたが、続

けていたら自分も鬱病を発症していたかもしれません。小山さんは人生の半分近くを病と共に歩み、どん底まで苦しさも怖さも味わった上で、ご自身の体験を客観的に話し下さり、その誠実さに胸を打たれました。治癒の段階としてまず安全な場を確保する、落ち着いたら逃げ込んだ場から一歩踏み出す。周囲の人は共感を示しても、意見や助言を安易に投げつけない。質問に対して言葉を選び、考えながら丁寧に紡ぐ回答には、深い説得力がありました。今後もお身体を大切に、自分らしい生き方、心安らぐ時間を大事に、活動して行かれるようお祈りします。ありがとうございました。

- ・ 鬱は私にとってあまり身近ではないものであった。しかし、鬱の方をサポートする側の人の在り方として、アドバイスをするのではなく、とにかくその人に共感を示すことが大切と仰っておいて、納得させられた。どうでもいい話が救いになることもあることを覚えておきたい。

浜田有子さんへ

- ・ 高次脳機能障害という病気はひとまとまりに考えられるが、実のところ個人差のある病気であることや、リハビリがとてみたいへんであること、失語症のコミュニティの存在等を教えていただいた。ぱっと見は健康者に見える病気のためヘルプマークを付けているそうです。ヘルプマークの存在と、どのような人が利用しているのかをもっと多くの人に周知してほしいと考えた。

本ヒューマンライブラリーの運営（スタッフの対応、会場の環境など）、その他についてご意見がありましたらお書きください。

- ・ 学生さんも一日お疲れさまでした。大変充実したプログラムをありがとうございました。是非何とか今後も続けていってください。素晴らしいイベントでした！！
- ・ 以前からヒューマンライブラリーというワークショップがある、ということを知っていたのですが、行く機会がなかったので、今回初めて参加することが出来て、良い機会となりました。交流会の際に大学院生スタッフの方のお話を伺えたことをも、一種、ヒューマンライブラリーであったのかと思います。

読者の感想文

- ・ 今回ヒューマンライブラリーに参加して、様々な「本」に出会うことができました。

私が特に印象的だったのはクルド日本語教室を行っている小室恵子さんのお話です。

私は埼玉県出身なので川口市にクルド人が多いことは以前から知っていました。ただし大学に入学するまでクルド人の子どもたちへの日本語支援や学校生活のサポートについて考えたことがありませんでした。そのため今回川口市でのクルド人への支援を実際に聞いて私の身近な環境にもこのような活動があったのだと驚きました。私が今回とくに興味深かったことはクルド人のお母さんたちも日本語教室に通っていることです。日本語教室を通じて日本語だけでなく学校生活の重要なことや必要なことを教えてもらうということが日本人にとっては何でもないことに感じられるようなことがクルド人のお母さんたちにとってはとても助かることだと思います。また小室さんが外国にルーツのある人のために活動したい、というわけではなく、社会貢献のために流れて始めたというお話にも感心させられました。私も将来は小室さんのような活動に興味があるので、挑戦してみたいと思います。

ひらりさんのお話を聞いて自分のLGBTQに対する固定概念やこれまでの自分の中の常識を疑うことができました。LGBTQの人はこんな服装、こんな見た目といった偏見、固定概念が自分に多少あるのだとわかりました。しかし現代社会ではLGBTQの人、またはLGBTQを公言している人と関わる機会も少なく、まだ知識や理解も十分ではないので、固定概念や偏見は生まれやすいかもしれないと考えました。そのような状況では自分自身で納得がいくまでじっくりと考えたり、自分自身で情報を取り入れたりすることが重要だと感じました。学校で保護者がお父さん、お母さんと呼ばれることに自分は違和感を覚えたことはありませんでしたが、ひらりさんのお話を聞くとたしかにおかしい話だなと感じました。テレビ番組でも中年の女性はお母さん、中年の男性にはお父さんという呼び方がしばしばあります。そういった呼びかけも生物学的な性が女性の人の子を産んでお母さんになる、男性はお父さんになるという固定概念に影響されたものだと思います。保護者を呼ぶときには性別を意識させないために学校側が配慮する仕組みが成り立つべきだと思います。

今回のヒューマンライブラリーを通じて今まで出会ったことのない「本」とであることができ、自分が知らなかったことをたくさん知り、経験することができました。個人に対して実際に話を聞くことの重要性も知りました。今回得た知識をさらに深めて今後の学びに生かしていきたいと思っています。

- ・ ヒューマンライブラリーでは、小山祐介さん、浜田有子さん、大谷重司さん、中嶋秀昭さん、及川澄志さんとの対話を楽しむことができました。

初めに、うつ病当事者である小山祐介さんからはうつ病になったきっかけや病院に行くまでの生活、うつ病のサインやうつ病の疑いがある方への接し方などを教わりました。お話の中で「ため息や不眠など自分のサインに正直になって休むことが大切」という言葉があり、特に印象に残りました。大学生になりアルバイトを始めましたが休むことに抵抗があり、少し体が重かったり頭痛がしたりする程度であると休めない自分がいました。自分のサインに正直になって休息をとるというのはすごく勇気があることだと思いますが、お話を聞いて自分の気持ちをもっと大切にしたいと思うようになりました。

浜田さんからは高次脳機能障害と失語症に関して、リハビリや日常生活でどんな変化が起きたのか、福祉支援などについて教わりました。リハビリの話では特別支援教育の授業の中で取っている言語障害の授業と重なる部分があり、支援する側だけでなく実際にリハビリを受けた方のお話を聞いたことで、より学びを深めることができました。また、病気をオープンにするかクローズにするかで、働き方や日常生活の送り方が違ってくると知り、どちらが良いとは一概に言えないと感じました。

大谷重司さんからは、視覚障害やベンチプレスにはまったきっかけ、ベンチプレスの魅力などを教わりました。ジムやベンチプレスの大会では、色々な障害を抱えた方がいても条件は同じであることから共生社会がすでに出来上がっているというお話を聞き、障害で枠を作るのも時には必要ですが、全員が同じ舞台に立つというのも大切だと思いました。そして、視覚障害者が何かを読むときにスマホのカメラで文字を読み取り、音声で伝えてくれる機能を使うことがあるというお話を聞いた際に、私も持っている物にそのような機能があると知らなかったため驚きました。

中嶋秀昭さんからは、世界の医療団として主にバングラデシュでの活動について教えていただきました。洪水の原因として海水温・気温上昇による水の蒸発や氷河融解による海面上昇が挙げられていて、原因を作り出しているのは先進国も同じなのに洪水のダメージを大きく受けている国には先進国ではない国が多く、日本含め先進国はもっと啓発活動をしていく必要があると思いました。また、洪水の被害にあった人は金銭面や今後の職業・将来に大きな不安を抱えていることを知り、国のインフラや生活・社会保障を立て直すために、国同士の相互協力が大切だと感じました。

及川澄志さんからは、多文化共修Bの授業で学んだことだけでなく、現代と昭和時代を比べ、昭和ではよ

り聴覚障害者が過ごし辛さを抱えていたことについて教わりました。テレビでの字幕が昭和はなかったことや、連絡手段が手紙や FAX に限られていたことは考えるだけで不便だと感じました。まだまだ支援が足りていない部分はあると思いますが、以前に比べて今の時代は技術の進歩で生きやすくなっているため、どんどん支援が広がればみんなが生きやすい社会に繋がると感じました。

- 先週、初めてヒューマンライブラリーの活動に参加した。午後用事があったので、15:30~17:30の2時間だけ参加したが、とても楽しかった。

まずうつ病当事者である小山さんの話を伺った。最近中国の社交アプリで多くの人が日本で働いたくて移住したくなってきた。なぜかという、中国で仕事を探すのが難しく、給料もひくいし、残業もとても多いからである。そのため、小山さんの話を聞いて、仕事のストレスに共感を持っている。一年前、中国で働いている時はとても辛かった。よく残業し、三ヶ月ぐらいずっと週に半日しか休めなかった。その時、仕事をやめないとすぐうつ病になると思った。先週小山さんの話を聞いて、「日本もそんなことがある」ということに驚いた。特に上下関係を重視している日本で、仕事のほかに人間関係取り扱いも大変だと思う。小山さんは自分が一生懸命頑張って、周りの人が助けってくれて直したのがよかったと思う。

うつ病の治療に関しては中国より日本のほうが優れていると思う。カウンセリングと心療内科がはっきり分かれていて、人々は自分の問題を自覚し、積極的に助けを求められる。中国では、近年うつ病になる人が増えてきても、周りの人の理解にもらえないことが多い。私の友達の中でうつ病当事者がいて、小山さんの話を聞いて、彼らの気持ちを少しわかって、これからどうすればいいのかも少しわかってきた。

小山さんの話を伺った後、中国帰国者2世である春子さんの話を伺った。今年2月の時、まだ日本にきていない時期で、日本のあるドラマで中国帰国者に関する話を聞いた。30歳ぐらいの時に日本に帰ったが、日本語全然話せなく、周りの人に差別されている男の人のころである。日本に帰っても仕事が見つけれなく、毎日お酒を飲んでいて、とても大変である。そして春学期谷先生の授業で初めて「中国帰国者のアイデンティティ」について勉強した。その日、春子さんは自分のアイデンティティについてシェアした。10歳まで中国にいたので、アイデンティティは中国人だったが、15歳ぐらい日本の国籍を変えて、初めて「私は日本人だ」を思っていたが、学校で「変な中国人」に言われて、アイデンティティがはっきりしなくなった。春子さんだけでなく、多くの帰国者がこの問題を抱えていると思う。しかし、最後春子さんがおっしゃったように、「自分は一体どの国の人だ」というアイデンティティが必要じゃなくて、一番重要なのは「私が私だ」と思う。

全部の話をお聞きできなかったのがとても残念だが、これから二年も続けて参加したいと思う。

- 今回ヒューマンライブラリーに初めて参加して、30分という短い時間でも自分の価値観が大きく広がったことを感じた。私は今回3名の本の方と対話をした。

1冊目(人目)は、国際協力 NGO 世界の医療団に所属していらっしゃる中嶋秀昭さんである。まず、バングラデシュにおける洪水難民への支援についてお話を伺った。バングラデシュは、日本よりも領土が狭いが、人口が多いという特徴を持っており、日本での洪水と比べ物にならないぐらいの甚大な被害が出ているということを学んだ。私は洪水と聞くと、最大でも1メートルの浸水を想像していたが、世界では150センチ以上の浸水が起きており、自分の視野の狭さを痛感した。また、バングラデシュは発展途上国の1つであり、一般的に公的な医師がおらず、ただでさえ心身の健康を保つことが難しいと言われていたが、洪水の影響でさらに医療体制は悪化していることを学んだ。次に、日本や私達個人は世界中で起きている環境問題とどのように向き合っていけばよいかについて話し合い、環境教育の重要性を感じた。特に、日本は国内の自然災害に目を向けがちであるため、世界に目を向けさせる必要性を感じた。また、個人としては、ごみ

の分別や NGO を通した寄付をこれからも継続していきたいと思った。

2冊目（人目）は、クルド日本語教室を主催している小室敬子さんである。小室さんのお話を伺って、日本語教育をするうえで様々な壁が存在するということを学んだ。例えば、子ども・親・教師との連携である。親の中には日本語を一切話すことができない方がおり、そのような場合に翻訳に頼るのではなく、教師もトルコ語を学び、簡単な日本語を使って親にも日本語学習を促すことが重要であると学んだ。また、子どもたちの進学のための壁についても学んだ。彼らの多くは VISA を持っていないため、受験に必要な住所や健康を守るための保険証をもっておらず、行きたい高校や大学への進学が困難であると聞いた。このことを聞き、教育に携わっていく者として、子どもたちの可能性を消さないように状況を変えていく必要があると強く感じた。

3冊目（人目）は、うつ病経験者の小山祐介さんである。小山さんとは、最後のフリートークでお話をした。最初の印象としては、自分の経験を話すことに億劫がなく、うつ病経験者であるとは思えなかった。しかし、話を聞いていくうちに小山さんのこれまでの険しい道のりに直に触れ、多くのことを考えさせられた。実際に、私の友人の母がうつ病経験者であり、その子が困った様子でいたが、うまく声をかけることができなかったことが心残りであった。これまで、困っている人にはアドバイスをするなど、なにか行動をしなければと考えていたが、本当に求められているのは話をきいて当事者が主体的に物事を判断できるように、「選択肢を広げるサポート」をするという意識が重要であることを学んだ。

様々な意見をきき視野の広がりを感じたので、これからも積極的に様々な方との対話を大切にしていきたい。

- ・ この度のヒューマンライブラリーで、たくさんのテーマに沿って、その体験したことがある方が本となり説明する形で、文字だけでなく会話で知識を得ることができ、興味深いイベントでした。私が読んだ本は、世界の医療団について色々説明してくださいました。「紛争、災害や差別により医療を受けることができない人に医療を提供する」という医療団のスタンスから、世界の隅々に居住している人に平等に健康になる手助けをする意志を感じました。お話の中で、気候変動による洪水で被害に遭われたバングラデシュが言及されました。公的の医療施設には薬品と医者が不足していた状況で、医療団が駆け抜けてサービスを提供して、当地の人が元気を取り戻していた姿を見て、医療がいかに大事な役割を果たしているのを実感できました。その上に、財産や畜産を無くした人と、食糧がなく困ってる人の姿を見て、地球温暖化の影響を感じた同時に、その危機を向き合えないといけない人がこれからも増えるのを想像して、気候変動が酷くなる一方で、対策がまだ足りないのを知り、環境対策の重要性を感じました。医療施設や医療機関が短欠の世の中の今では、この目標を成し遂げることにはまだ長い道を歩まないといけないのですが、地理や国籍の崖を超えて医療を普及しようと、自ら遠く離れた地に訪問し病気を治す仕事をする医者さんを見て、医療従事者の偉大さを改めて認識した。
- ・ 中嶋さんのお話では、現代起こっている気候変動をバングラデシュの事例を伺った。公的医療施設には医者がいないことや、薬もないことから患者はそこへは行かないことを聞き、洪水などで人間の社会が崩れていくことをどうにもできないことにもどかしさを感じた。しかし日本は、二酸化炭素の排出量が世界で五位であることから今後一刻も早く対策を取るべきだと思う。及川さんは頭の上に飛行機が飛んで音が聞こえる程度で重度の聴覚障害の方であった。中度レベルの音を体験してみたが、ほとんど理解することができなかった。手話にも種類があるそうで、これを機に学んでみたいと思った。小山さんは、自身の鬱の体験をお話して下さった。自分自身は鬱になったことはない。しかし、支える側になったとき、何かしてあげようとアドバイスをしたりするのではなく、とにかく相手のことに共感を示すことが大切だということ学んだ。りゅーやさんは LGBTQ として感じてきた差別や偏見をお話して下さった。自分自身ができることは何もないか

もしれないが、多様性を認め合える世の中になればよいな、とつくづく感じた。

総じて今までの自分には経験したことのないことを体験でき、良い一日となった。また参加したいと思う。

「本」のアンケート

今回の「本」としての自分の語りや読者の反応などについて感想をお書きください。

- ・ たくさんの人と会話が出来たのでうれしかった。私は、クルド人高校生の話しをしたかったが、質問が私自身のことについてが多かったので、自分のことをもっと話したほうが良かったのかなと感じた。
- ・ このたびも楽しくお話しさせていただきました。参加された皆様にバングラデシュ、この国での自然災害（への脆弱性）とこれへの対応、同国のみならず全世界的課題である気候変動とこれに対して留意していくべき事項の一端をご理解いただけたのであれば幸いです。
- ・ 今回はPPTを使わせていただき、話しやすかったです。しかし、PPTや紙芝居（前回）などの補助ツールを使うことは、本来のHLでは推奨されるのだろうかと不安になりました。そのあたりはぜひ読者や主催者のご意見を聞いてみたいです。
- ・ 今回は去年と少し変わって「分かりにくい高次脳機能障害」「障害枠として働くこと」を話しました。聞き手の方々はとても熱心な質問で、自分自身も新たな発見でした。例えば、視覚障害の大谷さんが浜田の本を聞いていただきました。「失語症は歌が苦手、脳の為のカラオケ大会が一般的になっている」と話した所をとても興味があったようで、交流会でもカラオケのことを話して下さいました。今回は他の聞き手の方々も、左脳右脳の変わり方や、言葉を出すこともリハビリになる効果など、とても深い「本」になったなあ、と思います。自身ももっと勉強をしよう！と嬉しい気持ちになりました。ありがとうございました。

本ヒューマンライブラリーの運営（スタッフの対応、会場の環境など）に関して、ご意見がありましたらお書きください。

- ・ スタッフの方は丁寧で良かった。帰りのバスの時刻表があれば、それに合わせてバス停に行くことが出来ると思った。
- ・ 手間のかかるオンライン対応を行ってくださり、ありがとうございました。
- ・ 司書の方（運営スタッフ）はタイムキープをしてくださったのですが、始まりの「しきり」もしてくださると、スタートを切りやすいなと思いました。当日は「ええ、はじめていいの？」的な、ぬるっとした感じの回もありました。「本」経験者なら問題ありませんが、初めての方なら、もう少ししていねいにフォローしていただけるといいかなと感じました。
- ・ 交流会は他のテーブル席に自由に移動できるといいなあ、と思いました。

スタッフのアンケート

スタッフとしての仕事についての感想、反省などをお書きください。

- ・ 当日に本を変えたいとの要望が何件か聞かれたが、うまく調整できたと思う。ヒューマンライブラリーは初めての参加であったが、タイムキーパーをしつつも本の話をしっかり聞けることができとても充実した時間となった。
- ・ お話が乗っている時に「時間です」と言いづらく、ついつい時間が延長になってしまいました。タイムキーパーをしながら貴重なお話を聞けたことがとてもよかったです。

- ・ 受付も皆さんよく気付いてくれたので、とてもスムーズにできたと思いました。読者の方は予約の時点で自分が誰を予約したか覚えていなかったり、変更したくなったりする方が若干おられたので、その時は手間取ってしまいました。何かいい方法はないか考えたいです。打ち合わせにほとんど参加できなかったにもかかわらず、スタッフの皆さんはとても感じのいい方ばかりだったので、とてもやりやすかったです。ありがとうございました。
- ・ ヒューマンライブラリーは初めてであり、そしてスタッフという役割が務まるか不安に感じながらの参加であった。ヒューマンライブラリーの参加自体も初めてであったのに加え、スタッフもやることになり、どのようにしたらよいのか戸惑い不安であった。しかしいざ行ってみると、臨機応変に対応できた点がいくつかあった。まず、読者が読む本を変えたいと受付に言いに来た際、人数制限を加味しつつ調整を行うことができた。また、スタッフが入っていないブースがあったため、私を含めスタッフが二人いたブースから移動してタイムキーピングを行えた。ただ、反省としては、読者から質問がなかった時に沈黙が続いてしまうタイミングもあり、その時にスタッフとして上手く、その場を回すことができなかったことである。次回以降、参加することがあればこの反省を活かしたい。